
勇者の事情。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の事情。

【Nコード】

N5739G

【作者名】

i m a i w a

【あらすじ】

勇者は目覚めると、仲間であるはずの同じパーティの戦士に剣を向けられていた。

「お前だけは許さない……」

小憎らしい顔でそう言つて、勇者である俺にごつい剣を向ける戦士アックス。俺と数年同じパーティでモンスター相手に戦いを共にした頼れる剣士だ。そんな彼が何故か俺に敵意むき出しの瞳と剣を向けて、差し向かいで戦闘態勢をとって剣を構えている。

俺が何をしたつていうんだ……？

何が彼の顔をこんな人相悪い鬼面に変えてしまったのか……？

俺には理解できなかった……声をかけようとしても、睨みをきかして距離を縮めてくる。こうなつては言葉は無用……剣を向けられた以上、俺も一人の剣士として引き下がるわけにはいかない。目は目を、歯に歯を、ごつい剣には——破動砲で迎え撃つ。波動砲、つまり、手の平に体に宿る全てのエネルギーを集束し、その奔流を相手にぶちまける——勇者の遠距離系最強魔法だ。いっちゃなんだが、俺は長々と剣で小競り合いなど好まない。だから、アックスには悪いが一瞬で消えてもらう。

「理由は分からないが……」

俺は地を思いつきり蹴つて、残像を残して後方へステップした。元いた場所は俺の足で削られた土が舞い上がり、視界が白く濁っている。太陽はもう既に高く上り丁度昼時だろう。ばかばか陽気だ。こんな状態でなければ、地面に広がる短い青々とした雑草の上で、マールと並んで横になり、ちくりあつてゐるはずだ。

ふ……しかしそれも今となつては、無理な事かもしれない……パーティの紅一点魔法使いのマール……柔らかな栗色の髪を腰まで伸ばした端正な顔立ちの女。年の頃16、元はたまに通つてた酒屋

で働いていた女だが、俺が気に入ってしまった……

恥ずかしがりやの俺が……酒屋にひっきりなしに通い、自分から声をかけ丹念に話を重ねて、心を許しあう仲になるまでこぎつけた女。ある日、『パーティに入らないか？』と童貞のなけなしの勇気を振り絞ってまで誘った女……マール。もちろん、マールは戦闘においても魔法においても、ど素人だった。だが、それでも俺と一緒に来てもらうには、同じパーティに入ってもらうしかなかった。彼女は最初、戸惑い気味に顔を伏せて、『そんなこと無理よ……魔法だって使えないし……』って断ろうとしてきた。ふふ……しかし、その点において俺に抜かりはなかった。俺は勇者になる前は、このメレンゲ地方最強の魔道師として名を馳せていたから、彼女に魔法を教え込むなんぞ、朝飯前だ。それを直ぐに告げると、彼女は少し間を空けて考える素振りをみせたが、少しして静かに首肯した。こうして彼女は一介の酒屋のはした仕事をやめ、栄えある勇者一行の頼れるメンバー且、俺の女として今日に至るまで幸せにやってきたんだ。

だが——今は……なぜか、憤りをあらわにしたアックスの後ろで舌を出して、たまに俺に罵倒を浴びせてくる。この状況がすぐには飲み込めなかった……いや分かる訳が無い。さっきまで寝ていたんだからな。

とにかく、アックスを波動砲で塵にして宙に舞わせる前に、理由だけは聞いておかないと……

「何でお前怒ってるん？」

俺は素直に聞いた。本当に理由が分からないので、軽い口調で淡々とアックスに尋ねた。だが、アックスは目をひん剥いて茶褐色の顔を真っ赤にした。黒い太いギザギザ眉の両端がつりあがり、剣を

小刻みに振るわせ始める。

「マールちゃんを……仲間であるマールちゃんを二束三文で海賊に売り渡そうとしたって本当か!？」

ああ、あいつまだあの事を根に持ってたのか……仕方ないっちゃ仕方ないんだが……しかも、マールの奴アックスにしゃべりやがったんだな……

そう……確かに俺は海賊に売り渡そうとした。でもあれは、言葉のあやだ。ただ、ちよつとマールが海賊の船長の大事にしているダイヤの首飾りを、殺して奪えとか無理いうもんだから、つい、かつとなつて、『お前! わがままにもほどがあるぞ! 海賊にお前を二束三文で売り払つてもいいんだぞ?』つて恫喝してしまつたんだ……あれからというものの、彼女は俺に怯えて、俺から距離を置き、アックスとばかり話してはいたが……

だが、あの時は仕方がなかつたんだ。だつて——その海賊は俺の父親だからだ! 実の父親を殺して財産を奪える子供がどこにいる!? いやいるだろうけど——俺は父は大好きだし、尊敬している。だから、つかつとなつて……だけど、その真実を話すわけにはいかず、マールは本気でいったものだと思ひ込んだままだ。それが災いして、一部始終をマールに聞かされ鵜呑みにした馬鹿がキレてると……納得だ。

真実を話せば分かつてもらえるだろう……しかし、それを話すわけにはいかないんだ。

簡単な話だ……エレンゲ地方で名声を得るがままにしてきた俺……誉れ高い勇者である俺が——悪名高い海賊の息子だつて言えるわけないだろ!? 同じ仲間になつて話せやしないよ。もし万が一、こいつ等の口から周りにばれてしまったら俺の名声は……あ

つというまにドブに落ち、黒ずんで一生海賊の息子という不名誉な烙印を押されてしまっただろう。

しかし——それを言わなければ、こいつらと戦うことになってしまう。しかも、それは一方的な俺の虐殺で終わってしまう。ただ、誤解されたまま、こいつ等を葬るわけにも行かないな……

さて、なんて言い訳しよう……

「ライティングウォール！」

マールの声が辺りに点在する大きな岩に反響して、俺の耳に届いた。俺は咄嗟にそれが何であるか判断すると、腰に下げていた剣を抜き取り上空に掲げる。見上げると、目も眩むような光の束が剣の切っ先に落ちてくるのが分かる。それらが切っ先の一点に吸い込まれるのを見て取り、剣を渦をまくように頭上で回転させた。飴でも絡めるように刀身にその膨大な雷のエネルギーを吸収させていく。

甘い甘い甘い……！ その魔法は俺が教えたものだ！ 効果もタイミングも弱点も全て知り尽くしているわ……！ そう心で叫びながら、雷を吸収しきって燦然と輝く剣を鞘に収めた。それをみたマールは案の定、青褪めていた。言葉もでないといった表情で呆気に取られて立ち尽くしている。

「バーカ！ 甘いのはお前だよ！」

だが……気がつく俺の間合いにアクセスが……

俺の漆黒のドラゴンアーマーの胸の部分に横合いからこつい剣を薙ぎいれて来た。魔法は囷か……少しは成長したなアクセス！？ だが、お前はひよっこ、この隊に入ってまだ一年よ、一年なんてま

だまだひよつこなんだよぼけが〜！俺はその刹那に、内でこれだけの事を呟いていた。これができるのは、圧倒的な力の差がなければ出来ない芸当だ。つまり、アックスと俺との時間軸がまるで違うのだ。時間の感じ方とでもいうべきか。要は止まって見えるんだ。

「バーカ！アホ！お前臭いんだよ！汗臭い！」

時間軸の差を利用して軽々とその剣を避けながら、その間に早口でアックスに罵詈雑言を浴びせかける。さすがに、言葉まで選ぶ暇がなくて、稚氣に満ちたものとなってしまっただけ……俺は大きくジャンプして、高く切り立った崖の上上がった。アックスたちからすれば、突然レポートでもしたかのように映っただろう。ただし、言葉だけは置き去りにされて、きっちりアックスには伝わっているはずだ。奴の脳に届くまで少し時間はかかるだろうけど。

「あ、あれ！？消えた？」

案の定アックス達が目標を失い、間の抜けた発言をはいてきよるきよるしている。その姿をしばし崖上から俯瞰していた。なんだかとてもしゃべり、惨めで陳腐な二人だ。良くこんな実力で俺に剣を向けたものだ。何だか切なくさえなってくる。さっきの言葉がやっとアックスに届いたようだ。一瞬びっくりして、虚空に剣を振るうピエロなアックス。

「臭いのはお前だよ！この弱虫の最低男！人間としてお前は最低だ！逃げてないで正々堂々勝負しろや！」

遅い反撃とも取れる罵倒が虚しく響く。だが、俺はそれに怒りを
駆り立てられていた。こう見えても俺はプライドが高く気が短い
だ。

あの野郎……言いたい放題すぎる……このガキ……俺の弟子の分
際で……生意気いいやがつて……と、憤りの念が頭の中で荒れ狂っ
ていた。だが、熱くなりすぎている自分に気づいて、冷静さを取り
戻そうと深呼吸を試みる。そうしていると、無駄に空転していた
思考が正常に動き始めてきた。そうだ……ここで怒りに任せて奴等
を消し去っても、何もメリツがないのも確かだ……ここは一つ……
俺が大人になって、何とか誤解を、いや、別の理由を考えてこの
場を治めるのも一つかもしれない。

何かいい方法は無いか……？

俺が高いきりたった崖上で突っ立って頭を傾げていると、マール
がみつけたらしく、しょぼい魔法を打ってくる。しかし、手でその
炎の塊を受けて軽く握りつぶす。アックスはこの高さまで昇れない
ようで、下の方で強気な発言を繰り返して吠えていた。それを完全
に無視して頭を捻る。

時折、来るマールの魔法をバンバン弾きながらずっと考えていた。
そんな時——突然、黒い大きな影が辺り一帯を覆いつくした……こ
の……荒々しいシャフトの音とエンジン音は——俺はそれに聞き覚え
があり、素早く空を見上げる。そこには——気球につながれてる
であろう、大きな漆黒の船の底が見えていた。船底に白いペンキで
塗られた骸骨マーク……これは……

「お、親父の船……！？」

俺は思わずでかい声で叫んでしまった。
その声は辺りの岩に反響しながら千々に響き渡る。

「え…… 親父の船って……？ あれ海賊船だろ！？」

下方にいるアックスがきょとんとした顔で呟いた。俺は耳が良いのできつちりその声を拾えていた。

ば、ばれちまった……こうなったら……

その夜――

俺達はなぜか和解して、親父の船で親父と共に三人で食事をしていた。

ありえない光景ではある。あの時あいつがあんな事を言わなければ……

「海賊が父親だったのか、羨ましい奴だ！」

俺は崖の腹を垂直に高速で滑り、アッシュを瞬殺しにかかっていた。だが、その合間に、アッシュが呟いた意外なその言葉に、高速の動きを緩めてアッシュの手前で動きを止めてしまう。突然、近接した位置に俺が現れ度を失い、尻餅について倒れるアッシュ。

「い、いつの間に!?　び、びつくりするだろ?」

「おい、お前、今なんていった?」

俺は高圧的な口調でアックスに聞いたです。

「え?　あ、ああ、えつとなんだっけ……そうだ、海賊が羨ましい
って言ったんだよ」

額に汗を垂れながらも、目は嘘を言っていない。それは俺ほどの
達人になると分かる。

アックスは心の底からそれを言っていた。少し離れた位置にいる
マールは、気が動転した様子で座り込んだままだ。海賊船が突然現
れたり、俺が海賊だったり、アックスが意味不明な発言したりで、
考えが纏まらないんだろう……俺だってこのアックスの発言は腑に
落ちない。だったら……何であそこまで怒った?……海賊が嫌いじ
やないのなら、なぜここまで俺が言ったことに敵意をむき出しにし
たんだ?

「お前海賊をどう思う?」

不意に口を衝いた言葉をそのまま吐いてみる。

「尊敬に値するね、かつこいいしさ!」

俺は首を傾げながら、アックスに更に問う。

「ならなんで、マールを海賊に売り飛ばそうと言った俺の発言に、
ここまで敵意をむき出す?　海賊みたいな下賤な輩に売り飛ばそう
としたのが、気に入らなかったからじゃなかったのか?」

俺は真剣な表情で顔の筋肉を強張らせ、アックスに尋問をした。
返答次第じゃここでアックスは天国に飛び立つ事になるだろう。しかし——アックスはなんか首を横にブルブル振りながら、汗をたらだらかいて取り乱している。

「お、おまえ、か、勘違いするな。そんなことで怒ってんじゃねえよ！！ 間違えるな！ 俺は海賊は大好きだ！ そのうちここ抜けて、海賊になりたかったくらいなんだ！！」
「なら、なんで……？」

俺は威圧を込めて声色を低くして囁く。

「だ、だって…… マールちゃんはどうみても美人だし、可愛いし、二束三文じゃないだろ！ もっと大金の代わりに売られていけないと、彼女も可哀相だ……」
「へ！？」「」

俺と離れた場所にいるマールからほぼ同時に声が漏れる……

「親方のとこの料理うまいっす！」

「ははは、そうか！ お前はいい海賊になるぞ！」

海賊に馴染もうと、親父におべっか使ってまで媚びるアックス。こいつは…… マールが海賊に売り飛ばされる自体は、良いと思っ
ていたらしい。ただ、金額があまりに代価としては低すぎるんでマールに失礼だろって事で怒ったとか…… わけ分らん奴だ。金額が

あつていれば、マールも納得して海賊に渡り、自分も海賊に心置きなくなれていたのに、そのチャンスを潰したことに腹を立ていたとか、後でほざいていた。滅茶苦茶勝手の奴かもしれない……

まあ……、いつか……俺もそろそろ勇者飽きてきたし、親父も年だし、海賊継ぐのもいいかもな！

(後書き)

ベタです。ベタベタ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5739g/>

勇者の事情。

2010年12月19日02時30分発行